【433】

氏　名（本籍）	一ノ瀬（いちのせ）　彩（あや）（静 岡 県）
学 位 の 種 類	博　　士（デザイン学）
学 位 記 番 号	博　乙　第　2501　号
学位授与年月日	平成 22 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科
学 位 論 文 題 目	**参加型大学キャンパス改修におけるデザインマネジメントに関する研究** －筑波大学キャンパス・リニューアルプロジェクトを事例として－

主　査	筑波大学教授	博士（デザイン学）	蓮　見　　孝
副　査	筑波大学教授	工学博士	安　藤　邦　廣
副　査	筑波大学教授		鵜　沢　　隆
副　査	筑波大学准教授	博士（デザイン学）	五十嵐　浩　也

論 文 の 内 容 の 要 旨

（目的）

本研究は、既存施設を資産とみなしその質的向上を図る試みとして筑波大学でおこなわれてきたキャンパス・リニューアルプロジェクトを研究対象とし、利用者である学生や教職員が改修に参加し協働する参加型キャンパス改修におけるデザインマネジメントのあり方について新たな知見を提示することを目的としている。

（対象と方法）

全体を 7 章で構成し、第 1 章・序論の第 1 節では本研究の背景とその目的について述べている。第 2 節では研究の対象と方法について述べている。研究対象は、学生参加による改修を 10 年にわたり 30 例以上を実施してきた筑波大学のキャンパス・リニューアルプロジェクトであり、2007 年度までに改修工事が完了した 33 例をその対象事例としている。対象の分析にあたっては、各プロジェクトの改修のプロセスに着目し、そのプロセスを、問題提起、企画、計画、設計、施工、さらには改修後の運営･利用という各段階に分類し、学生や教職員が関わる改修活動を「空間に関する活動への参加度」、「活動組織の支援・協議度」、「運営・使用に関する活動への参加度」という共通の指標によって評価し、それらを「空間／調査・検討」、「空間／実行」、「活動組織／協議」、「活動組織／支援」、「運営、使用／立案・検討」、「運営、使用／実行」を 6 つの軸とする「レーダーチャート」として可視化し、分析する方法を提示している。

（結果）

第 2 章では「筑波大学キャンパス･リニューアルプロジェクトの概要」について述べている。第 1 節では、キャンパス環境の総点検と再整備の必要からスタートした 2000 年度の「キャンパス・リニューアル計画」の策定から現在に至るまでの、各キャンパス・リニューアルプロジェクトの活動の経緯について概観している。第 2 節では、大学キャンパスの「施設管理の種類と方法」について、各施設整備の基本方針と目的、事業費の推移をグラフ化して位置づけ、その中で特に学生参加事例の事業費の種類とその割合について比較検討し位置づけている。第 3 節では、それらを一覧表としてまとめたうえで、各プロジェクトの発起人と学生参加の状況、さらには活動概要の特徴から、特に特徴的な 11 の活動内容について詳述している。第 3 章では、

各プロジェクトの端緒となる「問題提起・計画段階」について分析している。第1節で問題提起、企画、計画の各活動内容を詳細に分析する方法について述べ、第2節でそれらを「レーダーチャート」として表記し、全33事例の「問題提起・計画段階」のレーダーチャートを評価・分類し、それぞれの特徴を位置づけている。第4章では、「設計・施工段階」についてレーダーチャートを作成、分析し、主要な5つの設計活動のパタンと施工活動のパタンを抽出している。第5章では、改修工事完了後の「運営・利用」の活動について、同様にレーダーチャートを作成して分析している。特に7事例で学生の管理運営活動が継続していることを筑波大学の改修工事の顕著な特徴として着目している。また、教職員による改修後の管理運営は実施されているものの、学生による管理運営活動は継続せず、使用のためのマニュアル作成に留まっている18事例、及び改修完了時点で学生の参加が終了している8事例を確認し、レーダーチャートの作成によりそれぞれの管理運営活動の差異を明らかにしている。

(考察)

第6章では、前章までの問題提起、企画、計画、設計、施工の各段階でのレーダーチャートと改修後の運営、利用に関するレーダーチャートとの関係について、全33事例ごとに比較・分析を行っている。その結果として、筑波大学における学生参加による改修事例を大きく3つのグループに分類して位置づけ、各段階での充実した改修提案と改修後の学生による管理運営活動の継続が積極的に関係しているもの、それらの関係がほとんど見られないもの、それらの関係が中間的なものとして位置づけられるものを導き出している。第7章・結論では、前6章までの結果を踏まえ、筑波大学における学生参加によるデザインマネジメントとしての改修事例の特徴を指摘するとともに、問題点を精査している。本研究で明らかになった改修提案、改修方法、運営利用等のそれぞれの関係の位置づけは、今後のこうした改修事例の具体的な方法論として有益であると指摘している。また学生参加による改修方法の展開として、改修後の定期的・日常的な管理運営への参加を促す「セルフ・マネジメント」の活動の実践の可能性についても言及している。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、筑波大学のキャンパス・リニューアルプロジェクトという特徴的な多主体型の改修提案と管理運営の多様な試みをその具体的な研究対象とし、既存の建物や環境を維持しながらその質的向上を試みる手法としての「リニューアル」におけるマネジメントのあり方について、実践的調査に基づき具体的な提案としてまとめている点に意義がある。それぞれの事例について、改修提案から設計施工に至るまでのプロセスの詳細なデータを収集し、さらには改修後の管理運営の現状まで追跡してデータ分析をしている点は、極めて有用かつ学術的な意義があるものとみなされる。また、それらを「レーダーチャート」により可視化することで、各事例を統一的に比較分析したことは、今後の参加型キャンパス改修において、比較検討のための有用な指標となり得るものして評価できる。合わせて、十分な先行研究が行なわれているとは言いがたい「キャンパス・リニューアル」という研究対象に対し意義ある問題提起ともなると思われる。しかし筑波大学という限定的な研究対象から得られた本研究の知見は、他大学等への適用に際してかならずしも有効であるとは限らない。今後、本研究の成果をさまざまなキャンパス改修に適用させ、その有効性を検証する臨床的研究が求められる。

よって、著者は博士（デザイン学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。